悪い女　２

　夜の繁華街を久斗とルナは手を繋ぎながらぶらぶら歩いていた。急に人だかりがして、二人は巻き込まれ、繋いだ手が離れた。あっという間に人波に飲み込まれて流され、その人波が引いていった後、ルナは完全に久斗を見失ってしまい、一人ぽつんと寂れた裏通りに立っている自分に気付いた。

　複数の足音が近付いてきて、彼女は六人の男達に囲まれた。

「ヒューっ！　やりぃ！　いい女じゃん！」

　一人が野卑な声を張り上げた。

「よしっ！　捕まえろ！」

　一斉に襲い掛かってくる。ルナは恐怖を感じながらも、何とか対応した。常日頃から護身術を久斗に習っていたので、あっさり捕まることはない。しかも、彼女の身体は見た目ほどか弱くなかったのだ。

「げっ。手強いぞ、このねーちゃん」

　一人が舌を巻く。

「これでも喰らえ！」

　二人の男が棒切れで打ちかかってくる。しかし、それは陽動だった。背後からスタンガンがルナの腰の辺りに電撃を走らせた。

　改造人間のルナには、市販されているような通常のスタンガンは全く効かない。だが、その電撃で彼女は一瞬にして気を失った。対改造人間用のスタンガンだったのだ。

　ルナはすぐに意識を取り戻した。彼女が連れ込まれたのは潰れた喫茶店かスナックの散乱して薄汚れた床の上だった。左右に一人ずつ彼女の腕と脚を押さえ、一人が肩を押さえつけ、残りの一人がルナに覆い被さろうとしていた。スタンガンの威力は絶大で、ルナは腰から下が完全に機能停止の状態に陥り、感覚もなく、脚が全く動かなくなっていた。

「へっへっへ。早速いただき……って、なんだこりゃあ？」

　ルナのセーターをずり上げ、ジーパンを引き下ろした男の顔が唖然となった。

「どうなってんだ、てめえのカラダは！　パイオツもマンコもねえじゃねーか！」

　その台詞はルナの胸に突き刺さった。誰にも見られたくない自分の変わり果てた姿が今、晒しものにされていた。

――貴様ら、よくも……！

　怒りと憎しみで逆上した。

「こうなりゃあフェラでも構わねえ！　一発くらい抜かねえと収まりがつかねえだろうが！　しっかり押さえてろよ！」

　男は勃起してテントを張ったジーパンのファスナーを下ろすのに難渋していた。ルナが両腕を振ると押さえていた男たちはあっさりと吹っ飛ばされた。自由になった両手でルナは眼前の男の頭部を鷲掴みにした。

　今気付いた。快感や安らぎを与えることができるのなら、苦痛やストレスを与えることも可能なはずだ。全身の痛覚という痛覚に、許容範囲を超えた痛みの信号をぶちかましてやれば、生身の人間など他愛もなくショック死するのだ。

「おい大丈夫か？」

　ルナの足元に倒れた男に仲間の一人が駆け寄る。だが、男は息をしていない。心臓も止まっている。

「し、死んでる……」

　驚愕に震えた仲間が顔を上げると、他の四人も全員殺されていた。両脚が麻痺したまま、腕で上体を起こしているルナの姿には鬼気迫る恐怖を覚えずにはいられなかった。

「ひいいいいいっ！　ば、化け物！」

　最後の一人はパニック状態で逃走した。だが、若い男の全力疾走よりも、両脚を引きずりながらのルナの腕による移動の方が早かった。退路を塞いだルナは腕で跳躍し、残った一人の生命も奪い去り、廃店舗は静寂に包まれた。

　ルナは興奮状態が冷めやらぬまま、乱れた着衣を直した。下半身は依然として自由が利かない。メカの部分に重大な損傷が生じたようだ。

　ギイっと扉が開けられ、入ってきたのはラミウザだった。

「聖香さん……」

　ルナにも、今回の襲撃の真相が飲み込めてきた。不自然な人だかりに対改造人間用のスタンガン。全ては聖香の差し金だったのだ。

「あんたもなかなかやるじゃないの。あっという間に六人全員殺しちゃうなんて」

「お前も殺してやる……！」

　またぞろ憎悪の炎が吹き上がって、ルナの心を焼いた。

「やれるもんならやってみな」

　つかつかと歩み寄って、聖香はルナの目の前に膝をついた。

「ほら、真っ向勝負だ」

二人は互いに相手のこめかみを両手で挟みつけた。

「お前なんか、何度でもその無様な身体を人目に晒して化け物呼ばわりされるがいい！　そして一人残らずぶっ殺せ！　身も心も化け物に成り下って苦しめ！」

聖香の瞳は毒々しくぎらついた。ラミウザの「書き込み」能力が上回るかと思われた。

「久斗が言ってたわ！　同じシステムを組み込まれた改造人間同士なら、最終的に優劣を分けるのは、元々の人間の資質だって！　わたしは、あんたなんかに負けない！」

ルナは気力を振り絞って力を解き放った。やがて聖香の目から血が流れ出し、両手がルナの顔から離れて聖香はその場に横たわった。脳が死に、嶋野聖香という人間が死んだ後も、ラミウザのボディはまだ稼動していて、かすかな振動とともに手足がひくひくと蠢いていた。

「久斗！　久斗ぉっ！」

ルナは泣き喚いて愛する人の名を呼んだ。身も世もない苦悩と恐怖と後悔に打ちのめされて半ば正気を失っていた。肘でいざりながら汚れた廃店舗から這いずり出た彼女は、ただひたすら母の姿を探し求める幼い迷子のように久斗を呼び続けた。

「ルナ……やっと見つけた……」

　不意に現れた久斗はまるで幻想のように輝いて見えた。

「わあぁっ！　久斗っ！」

　ルナは泣きじゃくって両手を差し出した。

「どうした？　脚をやられたのか？」

　その暖かい声音は彼女をまっとうな世界に引き戻してくれると同時に、今しがたここで自分がしでかした所業からは決して目を背けることはできないと思い知らされた。

「久斗！　久斗！　もうどこにも行かないで！　絶対に一人にしないで！　でないとわたし……気が狂ってしまう……久斗とはぐれてしまったら、もう私は人間ではいられなくなってしまう……」

「おいおい、そんな大袈裟な……いててて、背骨が軋む……！」

　かがみ込んだ途端に思い切りしがみつかれて久斗は呻いた。

「早く帰って博士に脚を見てもらおう」

　久斗はバイクを呼び寄せる信号を発した。

「しっかり捕まってろよ」

「死んでも放さない！」

　二人を乗せたバイクは夜の闇に消えていった。